

# 甲奴郷土史だより

第 32 号

2024 年 1 月

甲奴郷土史  
研究会発行

近隣の歴史を探る Ⅱ 上下町 Ⅱ



鶴本節子

府中市上下町は『天領・上下』として、広く有名である。現在も古い町並みや建物が残り、多くの歴史ファンや風情ある街並みを愛する人がやってくる。

今回は甲奴町の隣町・上下町に迫ってみたいと思う。

【上下】の名前の由来について

上下町という名前を聞いて、県外の人には「おもしろい」とよく言われる。珍しいその名前については、以下のような説がある。

①分水嶺があるため、水が上と下へと分かれることから

②最初の上下村になるとき、上野村と下野村に挟まれていたことから

調べていて一番多い由来は、分水嶺があるからというもの。以前NHK総合の番組『ラウンドちゅうごく』で紹介され

た内容から、まず上下町の位置から説明したい。

上下町の標高は三八三・七m。分水嶺としてはそれほど高い場所にあるわけではないそうだが、上下町は水の流れるが分かれる山脈の上の境目にあるのだそう。



◆黄色い色の部分が上下の範囲。上の分水嶺は肉原にあり、下の分水嶺は国留にある。

この町へ降った雨は、一方は『江の川』になって日本海(上)へ、もう一方は『芦田川』になって瀬戸内海(下)に流れていく。上下町国留にある分水嶺は、過去に河川が流れていたことを示す稜線上のくぼみである『風隙(ふうげき)』にあたる。

また、広島県を地理的に大きく3分割すると、上下町の分水嶺より北側が中国山地になる。



上下町河井には、三つの県(広島県・岡山県・島根県)水系に流れ出る『三国分水嶺』という極めて珍しいポイントがある。



◆広島県内の分水嶺の地図。赤い丸で囲ったあたりが上下町。



◆三国分水嶺を紹介する、上下ライオンズクラブの看板。



◆右:上下町肉原にある分水嶺の碑

ちなみに広島県内の分水嶺で有名なのは、安芸高田市向原町にある分水界泣き別れ(ぶんすいかいなきわかれ)。安芸高田市指定天然記念物となっている。



次は歴史について紹介する。上下町の歴史に関する年表は次のとおり。

### 《縄文時代》

・上下町で確認されている最も古い「人の営み」の痕跡は、行年(ゆきとし)遺跡(上下町階見)で見つかっている。縄文ではなく押型文(おしがたもん)という文様のついた土器が出土し、縄文時代早期(約九〇〇〇〜七〇〇〇年前頃)に作られたと考えられている。





◆上下屏風洞洞窟遺跡  
洞窟入口は幅 1.6m  
高さ 1.1m



この洞窟は、上下川との標高差二〇〜三〇mの位置にあり、公園の整備工事に伴って人骨が出土したことから、入口付近で試掘調査が行われた。その結果、縄文時代前期(約七〇〇〇〜五〇〇〇年前頃)と後期(約四〇〇〇〜三〇〇〇年前頃)の土器が出土し、当時の人々が自然にある洞窟を住まいとして生活していたことがわかった。

・上下屏風洞洞窟遺跡(上下町小堀)は、広島県北東部の石灰岩地帯に、帝釈川の溪谷を中心とした約二〇km四方の範囲に、五〇か所以上の岩陰・洞窟遺跡が存在し、帝釈峡遺跡群として全国的に知られているその一つである。



◆九州歴史資料館に展示してある  
押型文土器



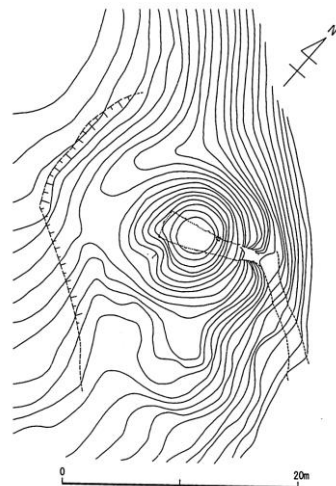
◆押型文様の作り方(再現)  
木の枝に文様を彫り、その木を押し付けながら文様を描く。



◆南山古墳 墳丘



◆右 南山古墳墳丘(等高線は25cm間隔)  
◆左 南山古墳の石室内部



その成果から、墳丘は全長約二三m、後円部の直径約一四・五m、前方部の長さ約八・四m、後円部墳頂と前方部墳頂の標高差二・五〜三mで、墳丘の形態について、前方部が短小で後円部との標高差が大きなタイプである

《古墳時代》  
・南山(第1号)古墳は、上下町水永と斗升町との境の峠近くにある。広島県史跡に指定されている横穴式石室をもつ前方後円墳で、平成三(一九九一)年に石室内の発掘調査と墳丘の測量調査が行われた。

ことがわかった。

石室の規模は、長さ八・四m、奥壁の幅約二・二mで、石室内には立柱状の石が突出して玄室と羨道を区別している。



上の写真は石室内部の写真で、赤い丸で囲った石が、玄室と羨道を区別していた。玄室とは、古墳の内部にあつて、棺を納めた部屋のこと。羨道とは、主に遺体を収容しておく玄室から、外部に通じる通路にあたる部分のこと。

遺物は七世紀前半の須恵器が出土しているが、石室の石材利用状況や庄原市唐櫃(からびつ)古墳に類似していることなどから、古墳は六世紀の終わり頃、約一五〇〇年前につくられたと考えられている。

その頃は、備後地域は大きく南部と北部の二地域に分かれていたようだ。南山古墳に見られる立柱状の石が突出する形態の古墳は、北部地域を中心に分布していることから、南山古墳は北部地域に属し、その南端に位置していたと考えられている。

### 《飛鳥時代》

和銅(わどう)二(七〇九)年、葦田(あしだ)郡を分割して、

甲奴郡が新設されたことが『続日本紀』に記載されている。これは、国府が整備されてきた時期と重なる。分割前の旧葦田郡は、府中と上下を含み、備後国のほとんどの郡と境を接し、位置的にも備後の中心だった。また、当時の主要な道路の分岐点や交差点が、北部は上下、南部は府中に集約されていた。このような地理的な条件を中央政府が重視して、葦田郡に国府が置かれたのではないかと考えられている。



◆古代「備後国」の行政区分と交通網

ちなみに国府とは、国という行政区を治めるための役所が置かれた地のこと。国府には「国衙(くが)」と呼ばれる役所の建物群が形成されて、そのなかで最も中核的な施設を『政庁(せいちょう)』(国庁)という。国府には、都から「国司」と呼ばれる役人が派遣された。



## 《平安末期・鎌倉時代》

土肥實平（どひさねひら）を『存じだろ。令和4年のNHK大河ドラマ『鎌倉殿の13人』で鎌倉殿・源頼朝の危機を救った人物で、源頼朝から大変長用されていた武士である。

この土肥實平が佐竹氏・木曾義仲・平氏征討に奮戦し、成果を上げたことで元暦元（一一八四）年に備前・備中・備後国の警備・治安維持に任じられた。備後の守護に任じられたときに、實平が備後支配の活動拠点として上下町有福に建てたのが、有福城と考えられている。

この地は、有福荘の中にあるが、隣接する高野山領の荘園として発展してきた大田荘の支配も手掛けようとしていたらしく、この地の在地豪族を手なずけながら、神領を横領していったようである。



◆上下町有福にある有福城跡  
入口には説明する看板がある。

しかし、源平合戦が終結すると、實平・遠平親子は文治二（一一八六）年後白河法皇から高野山へ改めて大田荘が寄進されると、源頼朝の命により、この地より退却し、備後と安芸国の境目にあたる沼田荘に本拠を構え、小早川氏として発展していくことになる。

有福城は現在広島県史跡に指定されている。

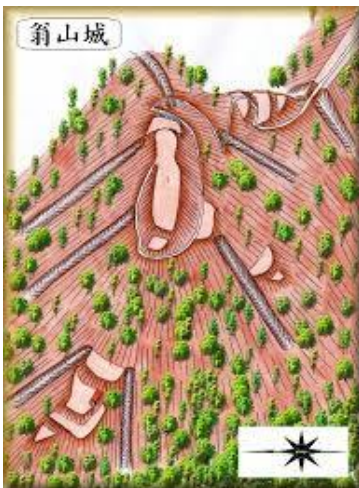
## 《南北朝時代》

建武三年六月、津口荘（つくちしょう）の地頭山内親西（じとう やまのうちのかんせい）は、備後守護の岩松頼宥（いわまつ らいゆう）から有福城（上下町有福）に立て籠っている竹内兼幸（たけうちかねゆき）を討伐するよう命令を受けた。竹内兼幸は中世備後国衙の役人であつたとおもわれ、同年九月には、府中市にあつた天台宗の寺院青目寺（しょうもくじ）の別当（寺務統轄長）弁房（べんぼう）らとともに、山内氏を攻撃した。岩松頼宥は足利尊氏（武家）方の有力部将、竹内兼幸・弁房は公家方（南朝）になる。

竹内氏を攻撃した武家方のなかには、長谷部氏（長氏）がいた。長氏は、翁山（上下町上下）に城を構えていた豪族である。このように、備後地方でも公家方・武家方に分かれて戦闘が繰り広げられており、一族内、あるいは近隣の者同士でも争っていた。その端緒は、南朝方の桜山四郎が吉備津神社（福山市新市町）で挙兵したことだったが、伝承では上下町佐倉も桜山氏ゆかりの地と云われている。



◆上下町上下にある翁山  
長谷部氏（長氏）の城があつた。



## 《室町時代》

中世には戦いや飢饉が打ち続き、人々が日常的に死と隣り合わせだったせいも、仏教が庶民の間にも普及していった時代。

臨済宗は、室町幕府に庇護された五山系と、それを潔しとしない林下(りんか)系に大別される。幕府は中国の制度にならない、天龍寺以下の京都五山、建長寺以下の鎌倉五山、それらの上に南禅寺の計一か寺を「五山」とした。五山の下に「十刹(じっせつ)」、さらに「諸山」という寺格を設定し、幕府がこれらの寺を管理・保護した。

備後では、十刹に尾道の天寧寺、諸山に善祥寺など五か寺があった。この善祥寺は上下町上下の善昌寺を指していると考えられている。善昌寺は正中二(一二三二五)年、当時の豪族斎藤美作守景宗(さいとうみまさかのかみかげむね)という人が弁翁(べんおう)という僧を迎え開かれたという伝承を持つ。弁翁智訥(べんおうちとつ)は当時の臨済宗の中で一派をなした紀伊の興国寺(こうこくじ)を本拠とする法燈派(ほうとうは)の著名な僧である。



◆弁翁智訥の木像



◆上下町上下にある善昌寺

諸山格を得るということは、その寺の大檀那である豪族にとつて、將軍・幕府に接近できるといふ機会でもあった。史料に寛正元(一四六〇)年に善祥寺住持(じゅうじ)任命のことが見られるので、その頃までには諸山の寺格を得ていたようだ。その後で、斎藤氏あるいは長氏が檀那として奔走したかも知れない。

五山系の寺は室町幕府の弱体化とともに衰亡し、宗旨替えをして存続した寺も多く、善昌寺も曹洞宗で再び繁栄した。

上下町有福の保泉寺(ほうぜんじ)、小堀の善応寺、階見の養源寺などは臨済宗永源寺派に属している。



◆上から有福の保泉寺、小堀の善応寺、階見の養源寺

## 臨済宗とは？

臨済宗は仏教、禅宗の一派。宗祖は中国、唐の禅僧、臨済義玄(りんぎいぎげん)。

いまからおよそ八〇〇年前(鎌倉時代)、中国、宋に渡り学んだ栄西(ようさい)によって、日本に伝えられた。



臨済宗は「公案（こうあん）」と呼ばれる課題を、坐禅や作務（労働作業）をしながらも常に熟考し、師との激しい禅問答を繰り返しながら、悟り、見性（けんしょう）を目指す。

臨済宗は「看話禅（かんわぜん）」「公案禅」と呼ばれており、僧侶は修行によりつちかった「気づき」を、信徒へ示し、仏道へ導く。

## 《安土桃山時代》

福島正則は、永禄四（一五六一）年から寛永元（一六二四）年までを生きた戦国武将。有名な【賤ヶ岳の七本槍】の一番槍の座を占める猛将で、生え拔きの豊臣秀吉の家臣として幾多の先陣で活躍し、豊臣秀吉の全国制覇に大きく貢献した。

豊臣秀吉亡きあとは徳川家康に接近し、【関ヶ原の戦い】で東軍勝利に貢献し、安芸国・備後国の二国四九万八〇〇〇石の大大名となり、広島城に入城した。

福島正則が治めた備後国は、一四郡六五郷からなり、甲奴郡は三郷となっている。



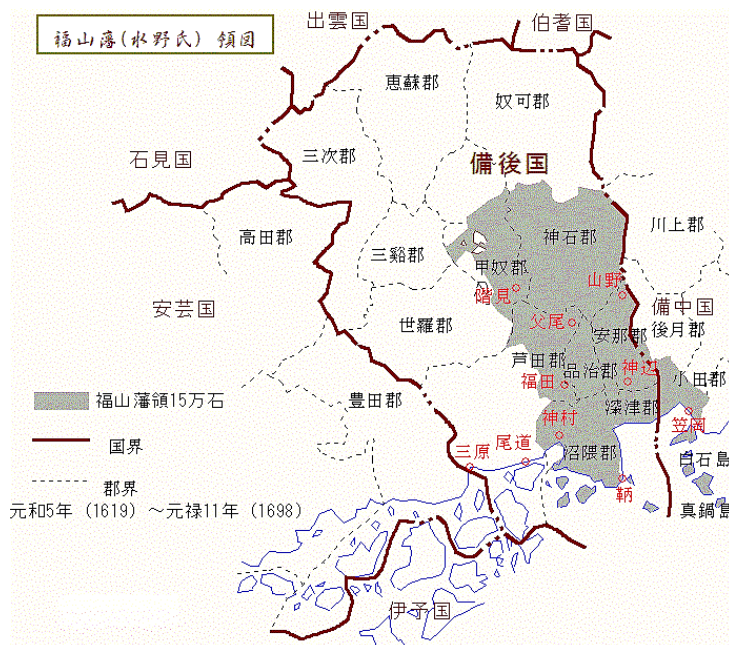
◆福島正則 出典:Wikipedia より



◆安芸国・備後国の境界  
出典:ひろしま WEB 博物館より

## 《江戸時代》

関ヶ原の戦い後、福島氏が備後・安芸を一時的に治めたが、元和五（一六一九）年からは水野氏が福山藩一〇万石（備後七郡と備中の一部）を治めるようになった。



◆水野氏が治めていた頃の福山藩の領図

出典:BGT『大陸西遊記』より

元禄一一（一六九八）年に水野氏は五代目藩主に跡継ぎが不在のため断絶。翌年領地が再検地された結果、旧福山藩は一五万石と算出された。元禄一三（一七〇〇）年に旧福山藩は二分され、一〇万石は新福山藩領（松平氏、後に阿部氏）、五万石は幕府領となった。上下と備中笠岡には代官が置かれ、上下代官（初代）



◆上下陣屋跡の石碑



◆大森代官所跡



◆明治2年 上下陣屋の図

曲淵市郎右衛門(まぶちいちろうえもん)は、安那郡・神石郡・甲奴郡の計七十一か村(約四万石)を管轄した。享保二(一七一七)年、備後の幕府領のうち約二万石が豊前中津藩領(奥平氏)に編入された。それに伴い、上下代官は廃止され、石見銀山大森代官所(島根県大田市)の出張陣屋に改められた。



◆上:上下キリスト教会 ◆下:旧警察署

上下キリスト教会は、元々商家の倉庫だったが、前後にキリスト教会として利用されている。

《明治時代》  
明治時代になり上下陣屋は廃止され、跡地には明治六(一八七三)年に学校が建てられ、その後も保育所や役場として利用されてきた。昭和一六(一九四一)年には『天領上下代官所跡』として、県史跡に指定されている。  
現存する建物で、明治時代のものとしては、上下キリスト教会や旧警察署がある。

出張陣屋には、大森代官(石見銀山も管轄)配下の手付・手代三、四名が派遣されて、神石郡・甲奴郡の一三か村と備中一二か村を管轄していた。こうした代官所・陣屋の機能を維持するためには、さまざまな諸経費をはじめ公用に関する人馬等の供出などが必要だが、これらは支配下の村々の負担とされていた。



旧警察署は、後年に改築されているが、見張り櫓は往時の姿を示している。

また、上下歴史文化資料館は、文学者岡田美知代の生家を改築したものである。翁座は町内有志の出資により、大正一四年棟上げし、昭和二年に完成した木造の芝居小屋である。歌舞伎の上演が可能な施設として設計され、芝居・映画の上演などで賑わった。

上下商工会館は、昭和五（一九三〇）年に上下警察署庁舎として建築されたモダンな洋風建物。



◆上から：上下歴史文化資料館、翁座、上下商工会館

## 【備後銀行】

備後銀行は、明治三二（一八九九）年に芦品郡府中町に本店をおいて開業した銀行で、府中を中心とした地域が内陸部における産業の中心地となっていた状況を背景に、府中商工業者の機関銀行として設立した。

設立当初の役員には、府中町と上下町の資産家が名を

連ねている。設立当初の資本金二〇万円、払込資本金五万円で、払込資本金五万円のうち半額は上下町側が負担していた。

昭和初期の金融恐慌や世界的な不況の影響を受け、昭和九（一九三四）年に藝備銀行（広島銀行の前身）に吸収合併され解散したが、それまでの約三五年間、数々の合併話に加わらず単独営業を続け、府中の商工業者を支えた地方銀行であった。

## 【備後の銀行（びんぎん）】

福山地域で最初の銀行は、明治一七（一八八四）年五月に設立された『**鞆銀行**』である。当初の資本金は三万円で沼隈郡鞆町に本店を置いた。銀行条例が改正されて「銀行」の商号が採用された備後地方最初の銀行である。

鞆銀行は明治三〇（一八九七）年に資本金三万円で『**鞆貯蓄銀行**』を設立して、役員は鞆銀行の役員が就任している。この銀行は鞆銀行の貯蓄部門を担当する目的で設立されたものであり営業を始めたが、業績は伸びず、今後の発展も望めないために、甲奴郡矢野村の素封家（民間の大金持）である山岡儀助に経営をゆだね『**山岡銀行**』と商号を変更した。鞆貯蓄銀行の本店は矢野村に移され、鞆貯蓄銀行の役員は辞任した。

備後北部は農村地域であり、銀行設立の多くは大地主や酒などの醸造業者が設立の中心者であった。



以上、上下町の歴史についてご紹介した。知っているように、知らないことも多かった。また上下歴史文化資料館へ行って、上下町の歴史・文化について調べてみるのも良いと思う。

◆備後地区銀行分布図 出典：ふるさとの銀行物語〔備後編〕より



＊上の写真は、備後のある市の昭和22年の写真です。  
ヒントは、長細い建物とその北側にある森の部分。

●答えは、最後のページに。

### 【参考資料】

・府中市教育委員会『ふるさととの歴史』  
・BTG大陸西遊記

・備陽史探訪の会 岡田宏一郎 『備後南部の金融機関の変遷について』（福山編）

- `blog-contour3901`
- `fun!fun!fuchu!!`







＊昭和 50 年頃のある地域の写真です。さて、どこだかわかりますか？ ●答えは、最後のページに。

## 季節のことば ≪縁起物・招き猫≫

二月二日は語呂合わせ『ニャンニャン』で『猫の日』だそう。猫の縁起物と言えば、『招き猫』ですね。

猫は農作物や蚕を食べるネズミを駆除するため、古くは養蚕の縁起物でもあったそうですが、養蚕が衰退してからは商売繁盛の縁起物となったそうです。

右手(前脚)をあげている猫は金運を招き、左手(前脚)をあげている猫は人(客)を招くとされます。両手をあげたものもあります。両手をあげすぎると『お手上げ万歳』になるのが『落ち』と嫌う人が多いそうです。

一般的には三毛猫が多いようですが、近年では伝統的な白や赤、黒色のほかに、ピンクや青、金色などもあり、それぞれに意味を持たせているようです。

黒い猫は、昔日本では『夜でも目が見える』などの理由から、『福猫』として魔除けや幸運の象徴とされ、黒い招き猫は魔除け・厄除けの意味を持つそうです。

猫でいうと、年老いた猫は不思議な力を宿す妖怪『猫又』になるとか、オスの三毛猫が天気を予知することができるとか、そういった伝承も数多く残されています。

【参考資料】・ウエキ・ペディア ・紺野うみ







文覚さん（庄原市高門）

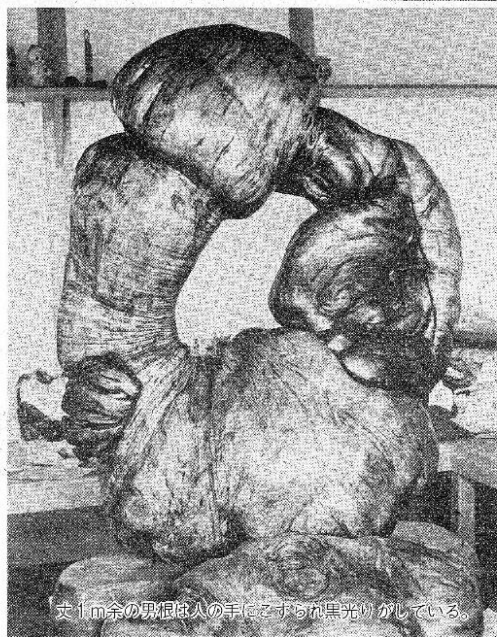
文覚さんは元、北面の武士で遠藤盛通と名乗っていたが、若い時、誤って愛する人妻袈裟御前を殺した。罪を悔い仏門に入り、後、怪僧文覚上人とうたわれるようになり源氏と平家の興亡に関与したため対馬に流されるが、流罪を解かれ京都へ帰る途中、この地で没した。

その時「子を真実に頼めば忽ち大願かのうべし」と遺言、いつの頃からか下の病に効験ありと評判になり、毎月16日の縁日には遠方よりバスで参拝する団体もある。

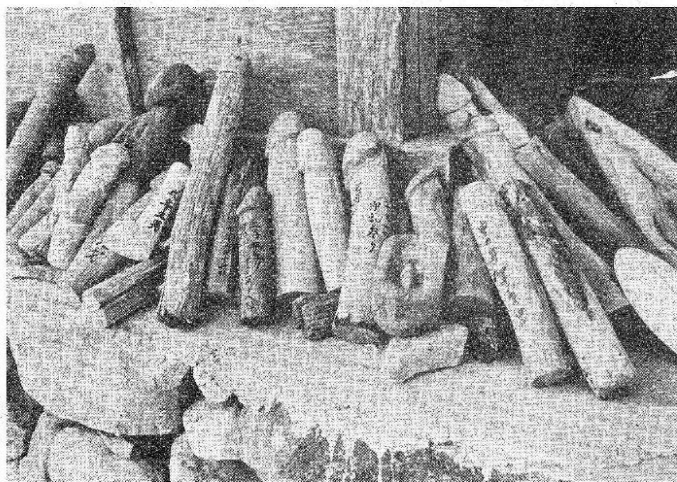
入口には1m余のケヤキの自然木でできた見事な男根をはじめ、お堂の内外には男女性器を型どった素朴な木彫りが所狭しと置かれている。



↑毎月16日の縁日には、地元はもとより遠方からの参拝者で香煙の絶えることがない。



丈1m余の男根は人の手にそすから黒光りがしている。



化を図るため1村1社制を発令、1村に氏神様のみを残して小社祠は合祠するよう命じている。そのため信仰は薄れ小社祠はさびれてゆくが、神なるが故に完全に消滅することなく今も根強く残っている。

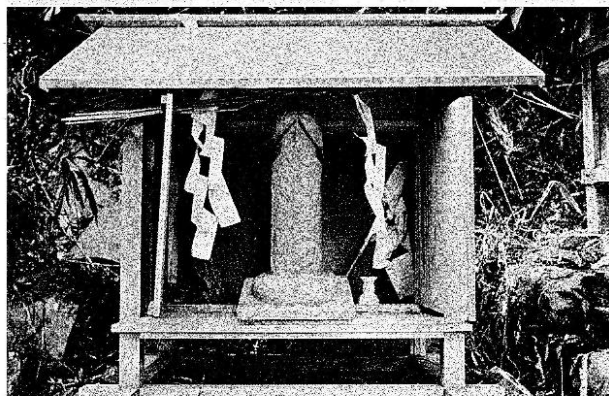
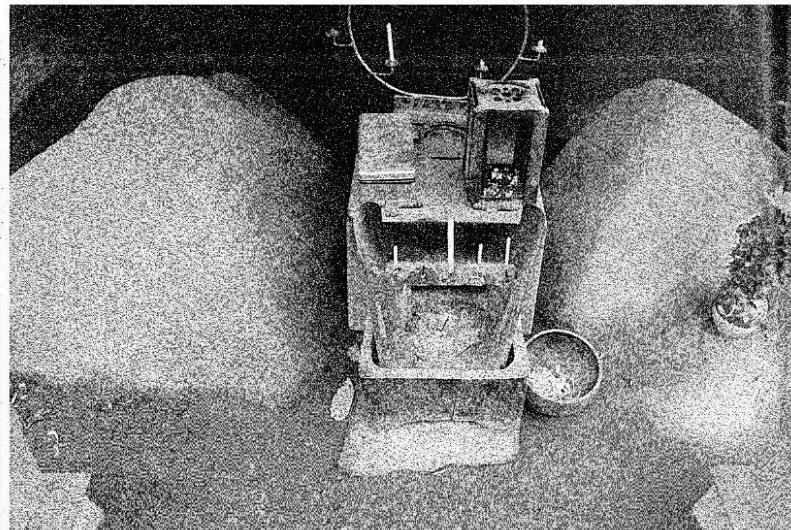
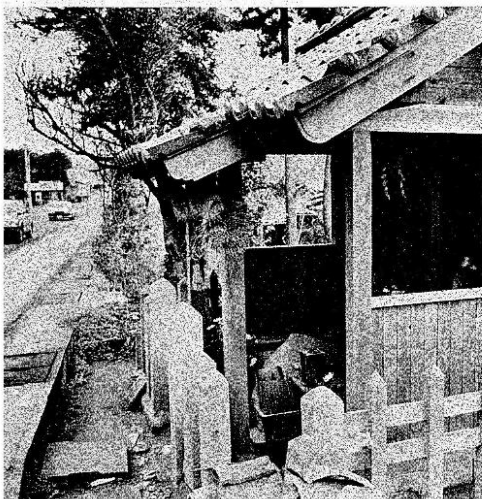
県北において性神と目されるものに、庄原の文覚さん豊松村のおん神さん、東城の金精（金生）さんなどが知られている。いずれも陰陽物（男女根）を祀ったり、奉納されているのが特徴で、その信仰は性病平癒、妊娠祈願が主体で、性器そのものを崇拝するエロチックな意味合いは乏しい。他に、おおまらさんと呼ばれる性神が2体あるが、男女の性器はそのものずばりであることを憚る風があり、地方によってさまざまな陰語が使われている中で、仏教徒が梵語で男根をマウラというところから麻羅と称したのが最も一般的に使われるようになり、このような名前がついたものと思われる。

金精さんといえば栃木県日光の金精峠にあるのが元祖といわれる。これは金精大明神としてその名を全国に知られる性神で、睾丸付きの立派な石造の男根が祀られて

いる。東城の金精さんもそこから勧請してきたのではないかと推測される。

金精さんが男女下の病に、また妊娠祈願に効験ありとするのとは対象的に、淡島（栗島）さんは婦人だけの性神といえる。和歌山市の加太神社を中心とする信仰で、特に淡島願人という民間信仰の伝播者が全国を歩いて布教したため、淡島さんと呼ばれる小祠は三次市内だけでも7ヶ所（三次高校史学部調査）あり、県北の各所に見られる。主に婦人病に効験ありといわれ、農婦の宿命ともいわれた冷え症や、妊娠・出産による病など、婦人病はそれだけでなく口外しにくく、医者もあてにできない時代だけに全国的に広まったものと思われる。また花柳界の女性の信仰が篤く、性病平癒だけでなく、客寄せ祈願でも知られていた。

その他ここでは妊娠、出産、育児に関する信仰を一連の生殖信仰＝性信仰としてとりあげ、科学の進歩によりすたれゆく素朴な民間信仰の一面を紹介し、県北の性神考としてみたい。



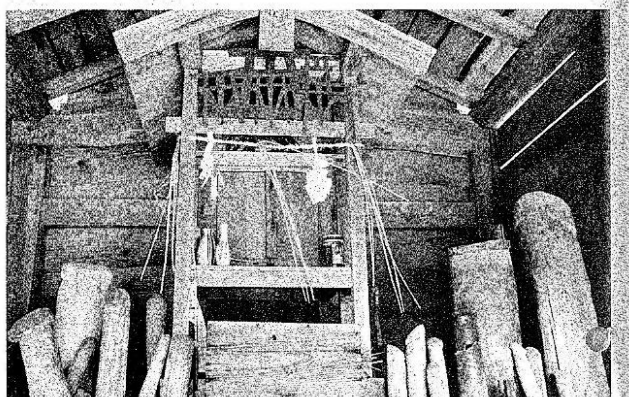
↑おおまるさん（三良坂町矢田）

八王子神社の境内社の一つで、小さな祠の中に30cm大のたくましき男根が竝居そうに祀られていた。作って間もないのか、木肌は白く波のような木目も美しく、これまでにない精巧な作り。ご愛嬌か、くびれのある所に目鼻が刻まれ、柔和な仙人の顔にも見える。この“おおまるさん”にまつわる由来はわからないが、下の病に靈験あらたかで、ご神体は古くなると地元の誰かが作りかえているという。

↑りんびょう神さん（甲田町下小原）

国道54号線沿い、梨の直売所が並ぶ花の木地区にある。俗に「りんびょう神様」と呼ばれ、花柳病や婦人病の神として知名度は高いが、その名前も由来も不明のまま。かつて祈願者はひきまきらず、小社には赤や白の熾やおこしで溢れていたが、社が新しくなってそれらは一掃された。

ご神体はピラミッド型の一対の石（左上写真）。夫婦石、陰陽石と見る人もいるが、祈願者はもっぱら女性のみ。



↑金精さん（東城町竹森）

道路から10mほど上がった山の斜面のお堂に祀られている。木製の大小の男根に混じって瓦製の焼物も見られる。

地元の古老の話によると、タタラに従事する男達が性病などの平癒祈願に勧請したのが始まりという。

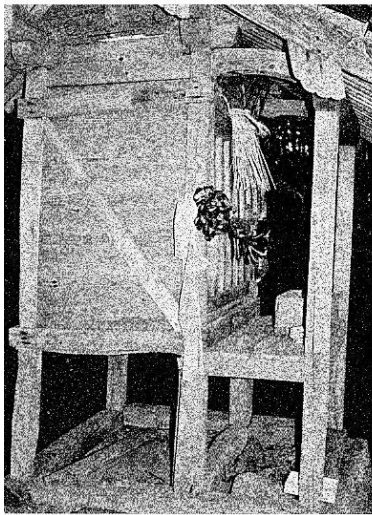
この金精さんと谷をはさんだ向い側に、婦人病の神、粟島さんが祀られている。男女の性神が近接しているのは珍しい。



↑おおまるさん（府中市竹藤）

上下町から約5kmほど南の山の中、小道をはずれたうす暗い林の中にひっそりとたえずむ小さな祠の中に桐の木の男根が数本。地元の話では、近くの庄屋が性病に悩まれたため岡山から勧請したと伝えられる。性病だけでなく、子供の夜尿症にもご利益ありといわれる。





## 栗島神社の記事

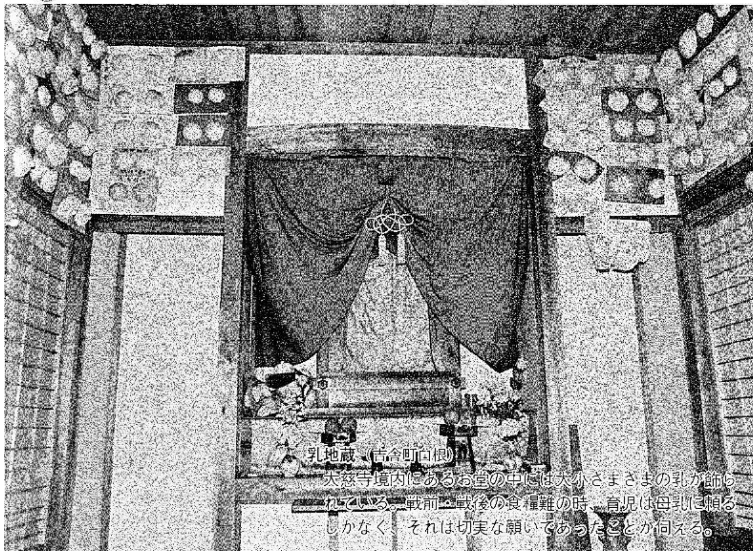
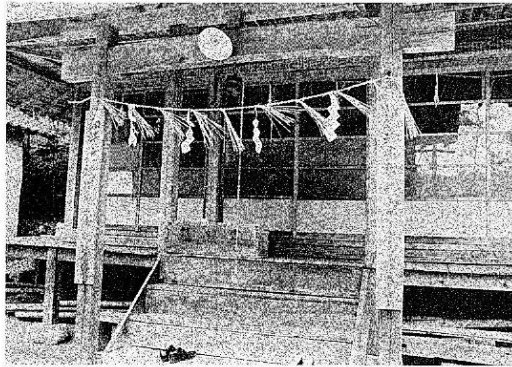
栗島神社（甲奴町梶田）

栗島（淡島）さんはそのほとんどが小祠で、梶田のように単独で神社として存在するのは珍しい。信者は備後一円といわれる。例祭日は旧3月3日。昔はこの前夜信者が集まり、社殿に夜ごもりして祈願していたという。安産、婦人病に効願ありといわれ、今も社殿には願ほどの腰巻や織が吊り下げられている。



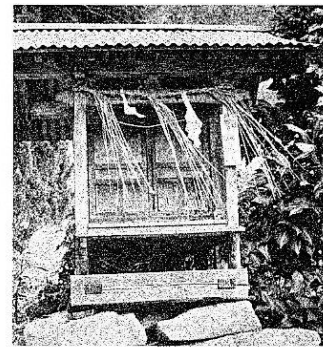
↑淡島さん（三次市向江田町宇池田）

裏山の中腹にあってめったに人は訪れないが、祠の横にはまだ新しいミニ版のおこしが下げられていた。婦人病にきくという淡島さん信仰は今も生きている。



乳地蔵（吉野町河内）  
大慈寺境内にあるお堂の中には大いささまの乳が並べられていて、戦前戦後の食糧難の時、育児は母乳に頼るしかなく、それは切実な願いであったことが伺える。

→栗島さん（東城町竹森）  
婦人病の神。中には眉物やおこしのミニ版が入っていた。



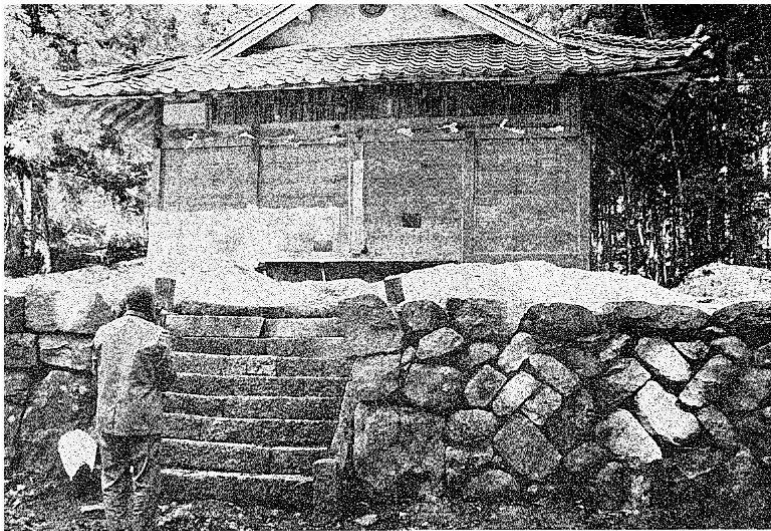
あわしまさん（吉野町清瀬）

川を隔てた不便な場所だが、今も信仰は篤く、祠のまわりにはよく手入れされている。



↑乳神さん（三良坂町灰塚字矢田） 顕徳寺境内にある乳神さんは鬼子母神。本来求児・安産・育児などの祈願を叶えてくれるが、中でも乳の神として知られ、願ほどきに納められた乳型が堂内に溢れている。

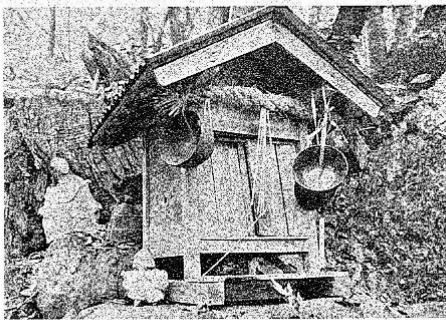
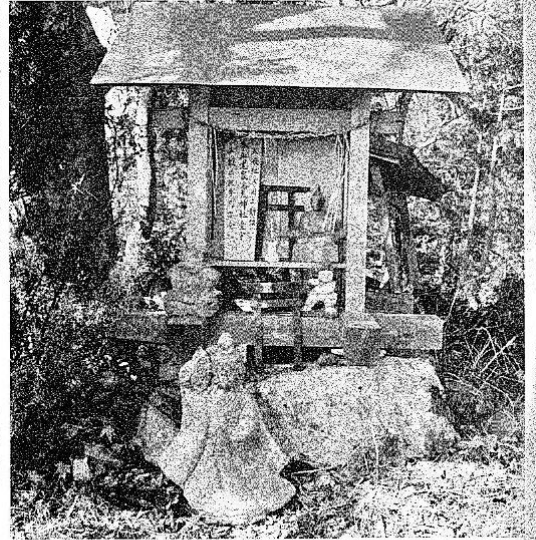




←龍守さん（比和町森脇）

龍守さんは「子守り神」ともいわれ、安産や子供の無病息災を叶えることで諸方の信仰をあつめている。

中でも、地元城主の御内室が当社に出乳祈願をして叶えられたことから、遠方からも出乳祈願が多く、奉納された乳型が本殿の軒下まで鈴なりにぶら下がっていたといわれる。

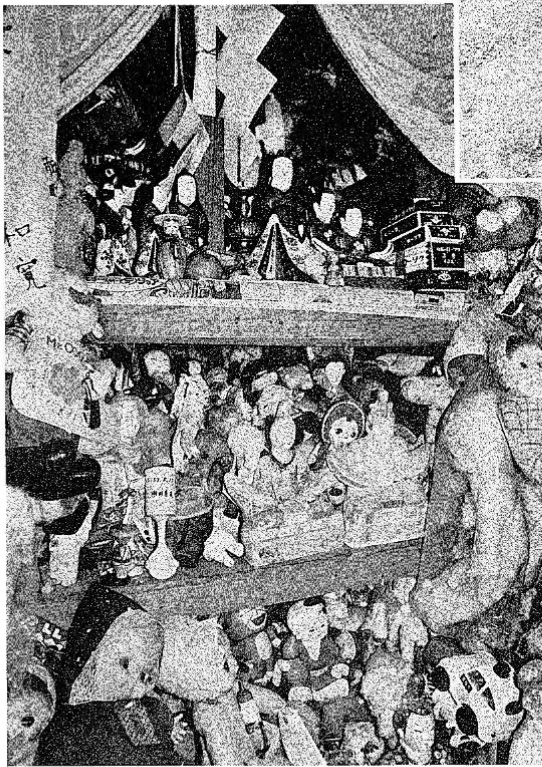


→よな神さん（高野町湯川）

国道そばの小高い山の上、子供の夜泣きに効くといわれ、トタン葺きの小さな祠のまわりには、色おちした三次人形が何体も置かれていた。

↑さいかんさん（布野村下布野字柳田）

林道のそばにひっそりとたたずむ。耳の病を治すといわれ、おわんに穴をあけたものが吊るされていた。又、音の神は子供の夜泣きを止めるといわれ、その祈願に三次人形が置かれている。



←産の神さん（布野村戸河内）

近くのお屋敷に奉公に来ていた女中が孕まれ、仕方なく生まれたばかりの赤子をこっそりと近くの川へ流したところ、夜な夜な赤子の泣き声がするようになった。

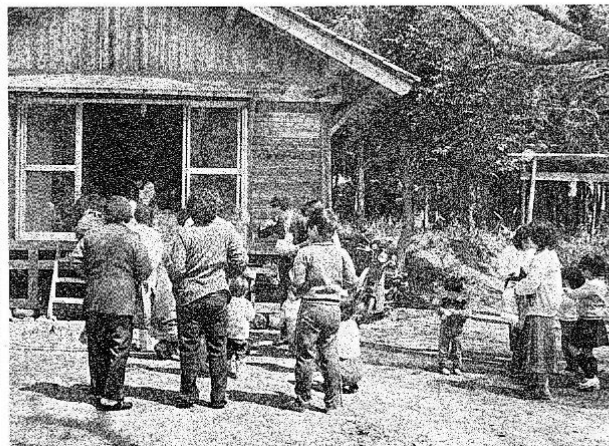
事情を知った地元の人が、赤子を成仏させようとこの祠を建てたところ夜泣きが止み、それからというもの子供の夜泣き、また安産の神として大切に祀られている。

祈願には赤い布で猿の形をした小さなぬいぐるみ（くくり猿）が献納され、現在も吊り下げられている。

←番神さん（君田村檀田字田和瀬）

子供の死亡で一番多かったのは、出産後から1〜2才までの発熱やひきつけで、それをこの地方では「ちりげ」といって恐れていた。そこで地方の人々は出産後の忌みあげの日とか最初の誕生日に、子供の無病息災、ちりげ封じを願って番神さんに祈願するのだが、その際いつとはなしに人形を奉納するのがなわしとなった。

現在、番神さんは田和瀬と寺原の2ヶ所にあり、お堂の中には江戸から明治時代の三次人形も含めて、新旧さまざまな人形で溢れている。



↑君田上小学校隣にある寺原の番神さん。田和瀬から勧請されたもので、四月第二日曜日の祭には神主の御訪いの後、神酒や餅のふるまいがあり、子供の無事な成長を願う。





## 碑銘抄



(甲奴郡甲奴町)

この歌碑は、備後の三祇園と呼ばれ、祭神として素戔鳴尊を祀った、その名も高い小童の祇園さん、と呼ばれる須佐神社の本殿右前に建立されている。

明治初年、社殿が老朽化したため改築することについて、甲奴町出身の代議士永井由清氏を中心に、近郷も含め氏子と共に募金活動によって浄財を集め、明治14年に現在の社殿が完成したのである。

その後十数年経過して、これに協力した近郷数十カ村民の創意により、社殿の完成を記念すると共に、敬神崇祖、病気災難等の安全祈願を含めて、当地の永久の繁栄を祈って、歌碑を建立したらとの意見が出され、関係者で協議した結果、さきの永井代議士が中心になって、推進することになったのである。

明治32年に至り、代議士永井由清氏から先輩の伯爵久世公嘉氏に作歌を依頼したところ、その敬神尊徳の志を諒として、同僚の伯爵久世道樺氏にこの旨を要請して作歌を諒承され、直ちに当神社の為に献詠揮毫納筆されたものである。次いで当時書の大家大阪市の愛石環亭氏の染筆、並びに東京帝国大学教授内藤耻叟氏撰文によって、明治32年1月に完成した豪華な歌碑である。

(秋山 薫)

郷土誌「げいびグラフ」から、甲奴町関連の資料もう一つ、碑銘抄 歌碑

作者…秋山 薫をご紹介します。

続ふるさとこぼれ話に掲載された歌碑の記事では、

とことばにさかえますらむこのさとの  
しづめとなれる神のみやしろ

と大きな切り石にこの歌が彫られている。

歌の作者は東久世通禧(みちとも)で、彼は天保三(一八三三)年に京都の公家の家に生まれ、長じて朝廷に仕えたが、文久三(一八六三)年の政変により公武合体派が権力を握り、尊皇攘夷派に属していた彼は失脚し、他の六人の同志とともに長州(山口県)へ落ちのびた。いわゆる七卿落ちの一人で、途中輓にも立ち寄っている。

その後彼らは九州太宰府へ移り、王政復古後に許されて京都に帰り、明治新政府の要職をつとめ、晩年には貴族院副議長・枢密院議長などを歴任した。

この歌碑の建設作業は本郷・西野の人々によって行われた。石工は矢多田の山本栄助、古城助市の二人であった。

## 甲奴神社探訪「大仙神社」

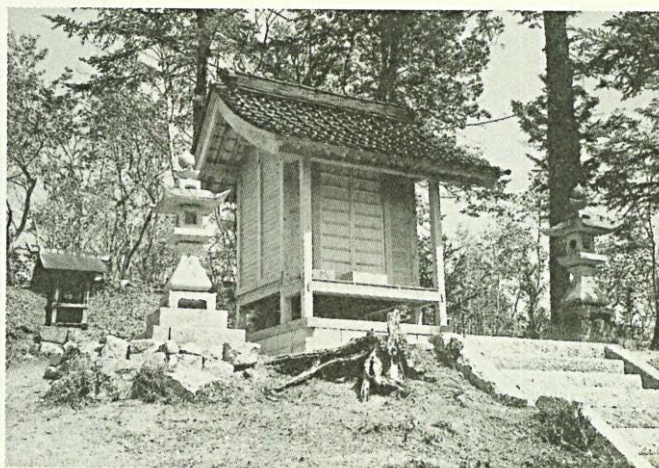
小童の大仙山の頂上に、大仙神社があるのをご存じだろうか。この神社の祭神は大己貴命（おおなむちのみこと）で、古事記では大国主命、大黒様である。ちなみに大己貴命は日本書紀での呼び名である。

本殿は、一間社流造で瓦葺。平成八年に再建された本殿の他に神楽殿があり、こちらは平成一二年に再建された。鳥居は二基。

《由緒》

牛馬は、農耕や運送に非常に重要で、農家には掛け替えのないものであった。その牛馬の安全を守るため、天保一二（一八四二）年に庄屋三名と組頭三名が中心となり、伯耆国大神山神社より御分霊を勧請して現在地へ奉斎した。

棟札の裏面には庄屋 取太郎 組頭 藤作 弥三次  
神宮寺浄光 広田陸奥 極兵衛 良右衛門  
種子 導師 田中刑部 願主 青山幾兵衛



大仙神社

◆出典：小童村誌より

### ●大神山神社について

伊達紀伊守 陶山加賀と書かれており、また大工 喜四郎 貞平と記されている。

麓 紋蔵

鳥取県にある神社である。式内社といつて延喜式神名帳に記載された神社、および現代におけるその論社を「延喜式の内に記載された神社」の意味で延喜式内社、または単に式内社（しきないしゃ）、式社（しきしゃ）といい、一種の社格となっている。伯耆国二宮で、伯耆大山山麓（米子市）の本社と山腹（西伯郡大山町）の奥宮とがある。祭神は、本社が大穴牟遲神（大国主命の別名）。奥宮は、大己貴命。大山に登った修験者が、遥拝所を設置したのが起源とされる。



◆大神山神社 本社

出典：AVATravel より



◆大神山神社 奥宮

出典：ニッポン旅マガジンより



# 懐かしの民具



『ほぼろ』をご存じだろうか。よく「ほぼろを売る」とか「ほぼろをふる」など、嫁が実家へ逃げ帰ることを指す言葉である。

『ほぼろ』とは、備後地方を中心に、広島県で使われている竹で編んだ籠の方言である。他の地域では、藁で編んだ籠のことを言うところもある。

庄原市総領町では、かつて『花ほぼろ』といわれる民具で知られていた。『花ほぼろ』は、春を告げる民具だった。新竹をザル編みにし、その白味がかった肌に、食紅の赤と、肥松のかがりで黒く帯を描いた『花ほぼろ』をこどもたちは買ってもらい、春を待つのである。そして春になれば、それを手に、野山で遊んだものである。よもぎやつくし、わらびやぜんまいなどが、こどもたちの手で摘まれ、食膳をにぎわした。

しかし、時代の流れとともに竹細工は次第にその姿を消し、『花ほぼろ』は床の間で生け花に使われるなど、民具としてよりも民芸品としての性格を強めてきている。



◆ほぼろ

出典：マリーあんころネットの部屋より

もう一つ、『唐箕』をご紹介します。唐箕と書いてとうみと読む。江戸時代に発明された唐箕は、穀物の実ともみ殻を吹き分ける農具として、非常に重宝がられ、農家には必ず一台はあった。

江戸時代から明治にかけては、各地で製造されており、世羅郡世羅町宇津戸でも明治時代の初頭ころから数軒の人々によつて作られ始め、世羅、御調、福山市一帯の農家に販売されていた。

しかし、近年の農機具の大きな変化によつて、唐箕自体が不要なものとなり、その大多数は廃棄の状態になった。



◆唐箕 出典：登米市より

【メモ】世羅町宇津戸に、かつて移住していた鋳物師(いもじ)丹下甚衛門の祖は、草部是助と伝えられ、治承四(一一八〇)年の東大寺焼き打ちによつて、灰塵に帰した大仏の再興に尽力した日本人鋳物師工人一四人の一人である。丹下甚衛門の鋳造銘を有す最古の例は、福山市新市町吉備津神社の天文九(一五四〇)年の鐘である。江戸時代には多くの梵鐘が鋳造されているが、県内では約三〇余りが現存している。また、鋳型あるいは古文書なども残っている。

## ご報告いたします

昨年近藤昭夫会長さんがお亡くなり、これからの甲奴町郷土史研究会をどうするか、役員会で話し合いを行いました。

藤原一三先生をはじめとする、甲奴町の歴史の伝承されてきた方々がお亡くなりになり、今の役員では力不足であることなどから、令和六年三月末で解散することに決まりました。これまでの活動の歴史を考えると大変残念です。

歴史についてこれからも学んでいきたいと思われる方は、三次地方史研究会という会が三次にあります。主に旧三次の歴史について学んでおられ、一月には三次市教育委員会と合同で、『寺町廃寺』について研究発表会を開催されました。担当の方は加藤さんとおっしゃいますが、少し専門的な内容を月に一回集まって学んでおられます。入会はいつでも歓迎します、入会金と年会費が必要とのことでした。

それから、甲奴町振興協議会連合会の上迫事務局長と相談し、カーターセンターの業務の一つとして、文化財の伝承なども行っていくことになりました。その一つとして、引き続き『甲奴郷土史だより』を発行していくこと。小・中学生を対象に、町内の史跡を見て回る行事の企画など

も考えていこうと思っています。

令和六年度からも『甲奴郷土史だより』を読みたいとお考えの方は、カーターセンター 鶴本までお知らせください。



よろしくお願いします。



「こはご」でしよう？の答えです。

昭和22年の写真は、「福山駅・福山城周辺」でした。

昭和50年の場所は「福山寺周辺」でした。

今回は、『福山』がキーワードの「こはご」でしよう？でした。

### 事務局より

- ・昔の話や地区の行事など、ご寄稿・お聞かせください。
- ・古い写真や資料等がありましたら、お知らせください。
- ・「甲奴郷土史だより」へ登載していきます。
- ・出品物につきましては、責任を持って返却しますので、ご連絡をお願いいたします。

連絡先 鶴本 節子(カーターセンター)

☎〇八四七六七一三三三五